



TITLE:

追憶文財部先生を憶ふ

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. 追憶文財部先生を憶ふ. 經濟論叢 1940, 51(2): 256-258

ISSUE DATE:

1940-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131412>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭

故財部教授遺影署名及原稿

論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

東亞新秩序建設と新國民政府_{の發展性}……………文學博士 矢野仁一

研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

記事

財部教授逝く

故財部教授年譜及著書論文目錄

追憶文

神戸正雄 本庄榮治郎 蜷川虎三
木村喜一郎 吳文炳 宗藤圭三
青盛和雄 松岡孝兒 石川興二
黒正巖 藤本幸太郎 谷口吉彦
岡崎文規

附錄

彙報

外國雜誌論題

めて特異な印象ふかいものであつたから、今でもはつきりと頭に残つてゐる。

私共は統計學の講義を聴いたのであるが、緒論に始まつて緒論に終るのは、すでにその當時からのことであつた。その内容は別に章節を設けるのでもなく、一讀すれば茫莫として捕捉しがたきものではあつたが、併し嚙みしめてよく熟讀すればするほど、味もあり深味もあるものであつた。ことに先生の名著『社會統計論綱』は、その當時からすでに相當の稀觀本であつたが、先生の講義を補ふためには是非これを讀む必要があると言ふので、われ／＼は古本屋を探し廻つたり、友人に借り合せたりして、それを讀んだものであつた。

一
私が經濟學部に入學したのは、大正八年九月のことであつて、經濟學部の創立後三四ヶ月を経たところであつた。その當時は財部先生もまだ今の私よりは遙かに年も若くて、また元氣であつた。先生と私との間には、何ら特殊の關係もなく、たゞ普通の教授と學生との間に過ぎなかつたから、別に取りたてゝ言ふほどの追憶もないが、兎もかく先生の講義よりは、すでにその當時から後年の様子と大差なかつたものゝ様で、極

財部先生を憶ふ

谷 口 吉 彦

卒業後は大學院に残つて研究生活に入つたけれども、當時の私の研究は、經濟學史であつたから、直接に先生の指導を仰いだわけではない。併しその後には勧められて和歌山高商へ轉出した頃から、商業學の研究を始めると共に、謂はゆる實證的研究を進めることゝ

なり、従つて統計的資料を利用する機會が多くなつたから、極めて間接ではあるが、先生の統計學の學恩に浴したわけである。また先生の學部長時代は、前には私の和歌山在職時代であり、後には在外研究時代であつたために、殆んど何等の印象も残つてゐない。

二

ごく最近では今年六月初め、即ち先生の逝去される約一ヶ月前に、何年ぶりに先生の御宅を訪問して、御健康をお伺したことがあつた。その當時は大變にお元氣で、足が不自由で困るが講義には差支ないといふお話しで、いろいろ學部の話なども出て、一時間近くもつい長座してしまつた。その時にも申上げたことで、またそれ以前の三、四月頃にも學校で屢々申上げたことであつたが、最近の健康がどうも案ぜられるので、本年度は先生の最後の學年でもあり多少は講義を輕減されても、専ら靜養せられる様にとお勧めしたのであるが、先生はいや最後の學年であるからこそ、完全に義務を果たしたいとお考へで、從來どほりの論義

や演習をつゞけてゐられたのであつた

六月下旬の或る朝のこと、御令息均氏が突然に學校に見えられて、先般來の先生の御病氣が可なり重態に陥られたことを傳へられた。御健康については前述の如くお案じしてはゐたが、特別の御病氣で病床に就かれてゐることは、誰も全く知らなかつたので、私も非常に驚いた。すぐに學部の先生方に急報しておいて、私も直ちに駆けつけようと思つたが、生憎その日は午後三時まで講義のつゞく日でどうにも出來ず、午後四時頃やつと病床に御見舞することが出來た。今朝は大變に悪かつたが、その後よく熟睡したので、非常に元氣になられたところであつた。なるほど相當に憔悴してはゐられたが、併し想つたよりは遙かに元氣で、顔色もよく意識も明確で、いろいろお話しを伺ふことが出來た。どこにも痛みはないから、かうしてゐても少しも苦痛はないが、併し食事が進まないで困る。今年は最後だからと思つてゐたのに、たうとう休まねばならぬなどとも話してゐられた。私の直観では、先生は

必ず恢復されるに相違ない、先生は壽命の強い方だから、この大患も必ず克服されるに相違ないと安神して歸つたのであつた。

三

それからは毎日電話で御容體を伺つてゐたが、大體は小康狀態を維持されてゐる様子であつた。七月四日には東上の用件があるので、最後の御容體を伺つて見ると、やはり小康狀態の持續といふことで、私も安神してそれを先生方へ通知すると共に、私は上京したのであつたが、翌々六日の午後宿所へ電報が來て、先生危篤の報を受けた。私は取るものも取りあえず、即夜東京を出發して七日朝歸つて見ると、遂に今朝四時御永眠といふことで、最後のお目にかゝることは出来ず、遺憾に耐えなかつたわけである。

先生の學問に就ては、他に語るべき人は多數にゐられる。また先生の生活の中には、われ／＼凡人の企及を超越した部分も少くはなかつた。併し先生が世俗を脱却して、名利を追はず、功績を誇らず、悠々自適し

て學を樂しまれる純學的態度の中には、われ／＼として大に學ぶべきものが少くないと思はれる。ことに先生が最後まで吾が學部を愛して、學部のために常に心を碎いてゐられたことは、私のよく知る所である。この點において吾々は先生の遺志を體して、學部のために出來うる限りの努力を續けねばならぬ。これが即ち先生の學恩に報ずる所以に外ならぬと痛感する次第である。